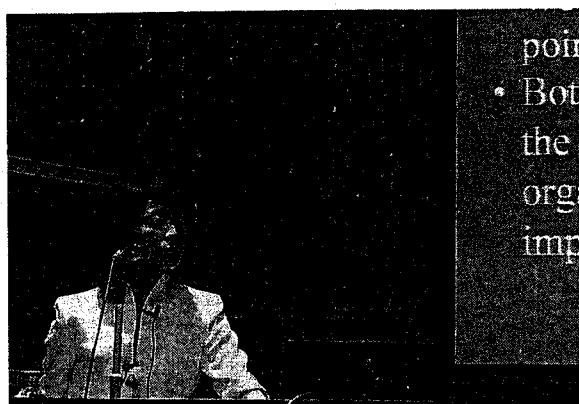


21世紀 COE プログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」
第2回「言語・脳・認知」国際学術フォーラム



(ドロンカーズ博士(最右端)の発言に
聞き入る田中博士、鈴木博士、ホルヘ博士)



(鈴木博士(医学系研究科)の講演)

去る10月12日、東北大学21世紀 COE プログラム(人文科学)「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」主催による「第2回言語・脳・認知」国際学術フォーラム：脳機能画像・失語症・計算論的モデル」が、東北大学マルチメディア教育研究棟2階ホールにおいて開催されました。出席者は、本 COE プログラムの関係教官や大学院生に加えて、北海道大学、盛岡大学、山形大学、東北福祉大学、宮城教育大学、宮城学院女子大学、茨城大学、筑波大学、東京女子医大、東京大学、慶応義塾大学、上智大学、明治大学、早稲田大学、東京医科歯科大学、一橋大学、東京都立大学、北陸先端科学技術大学院大学、NTT 東北病院、東京都老人総合研究所などからの教官、学生、一般の方々を含めて全国から140名にのびりました。

本 COE プログラムは言語学、脳科学、人工知能、心理学など言語科学分野における統合的な研究教育拠点形成を目指し、言語の仕組みの解明や失語症、人間とロボットの対話などへの応用を目的としています。東北地区の国立大学で初めての研究専用の機能的核磁気共鳴画像装置 fMRI がこの10月より本 COE で本格的に稼働し、実験が始められたことを記念して今回のフォーラムが開催

されました。その主な趣旨は、言語学で得られてきた言語現象データの脳内表象を探り、その計算論的なモデルを模索することによって、言語学・認知心理学を中心とした言語科学と医学・工学での成果との学際的な統合の試みの一端を公開しようとするものでした。

まず、本 COE 事業推進担当で国際文化研究科の佐藤滋教授から、今回のフォーラムの全体構想が説明され、さらに脳神経外科学が専門の吉本高志総長からは、医学を含む学際的なテーマで本拠点の果たすべき意味と役割についての話をいただきました。その後講演に入り、未来科学技術共同研究センターの川島隆太教授が、「機能画像による脳内言語処理機構研究」と題して、脳機能画像法によって得られた言語現象に関する知見の紹介と最新の研究成果について講演し、次にキューバの神経科学センターから本年 COE フェローに移籍したリエラ・ホルヘ博士から「多モダリティ機能画像技術の融合の展望」の論題で、脳内のデータの時空間分解能に関する信号処理技術についての講演がありました。昼食をはさみ、医学系研究科の鈴木匡子博士が、「言語の神経基盤：臨床的検討」という題で、脳内の言語基盤を解明する上

で、失語症の臨床研究に代表される臨床的・質的アプローチと、fMRIに代表される実験的・量的アプローチの双方の長所を組み合わせしていくことの重要性を論じられました。理化学研究所脳科学総合研究センターの田中繁博士は、「時間と順序の脳内表現に関する計算論的モデル」という題目で、脳の並列的計算処理機構からどのようにして身体運動、言語、思考のような時系列的な行為が生み出されるかに関する計算論的モデルを提示されました。米国・カリフォルニア州保健局失語症等研究センター所長のニーナ・ドロソカズ博士は「損傷部位分析に基づく脳内の言語領野マッピング」という題目で、ブローカ野、ウエルニッケ野といった伝統的な脳内の言語野以外の言語関係

領域の発見を含む、脳内の言語機能マッピング研究の最新展開について話されました。その後5名の講師全員の参加による総合討論が行われ、活発な議論がなされました。最後に本COE拠点を代表して国際文化研究科の堀江薫教授から終了の挨拶がありました。今回のフォーラムは、最初の川島教授の講演が、一般公開に関する導入という意味を含めて日本語で行われましたが、それに続く他の4講演はすべて英語で行われ、また総合討論も英語で行われました。それにも関わらず、一般市民を含めた参加者からの質疑応答は活発で、外部からの参加者、学部学生、大学院生も含めて活発で有意義な意見の交換がなされました。

(国際文化研究科)